

1 研究課題（自校の児童における課題）

（1）教科における課題

○R5 全国学力・学習状況調査の県平均・全国平均との比較・見い出された課題等

①本校は、2教科(国語・算数)とも、県・全国に比べ高い「平均正答率」である。

家庭学習の充実や不断の授業改善、教育課程の見直し等の成果といえる。今後もその結果に満足することなく引き続き着実な学力の定着を図っていく努力が重要である。

②授業改善に向けて取り組むべき課題

【国語】

学習指導要領の3領域（「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」）とも平均正答率は県・全国に比べて高い、もしくは有意差がないものの、「書くこと」に関わる設問から、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題が見られた。

【算数】

学習指導要領の5領域（「A 数と計算」「B 図形」「C 測定」「D 変化と関係」「E データの活用」）とも平均正答率は県・全国に比べ高い、もしくは有意差がないものの、「図形」にかかわる設問から、高さが具体的に示されていない複数の三角形について、それらの面積の大小を判断するのに必要な情報を見出し、その理由を記述することに課題が見られた。

③課題の解消や伸長に向けて重要になる指導について

【国語】

「書くこと」に関する課題から、必要に応じて、教師が図表やグラフなどを用いたモデルになる文章を提示するなどして、図表やグラフなどを用いると自分にとっても考えを深めやすく、相手にとってもよく理解できる文章になることを実感できるように指導する。

【算数】

「図形」に関する課題から、問題を解決する際に必要な情報を主体的に見出し、実際に活動することも取り入れ解決策を考えることができるような指導を行う。

（2）生活習慣・学習習慣等における課題

「全国学力学習状況調査」の質問紙調査より、「自分には良いところがあると思う」「将来の夢や目標を持っている」「困りごとがあった時にいつでも相談できる」「家では計画を立てて勉強している」「地域の行事に参加している」といった質問に対し、低い状況が見られ、改善が望ましい状況が見られる。また、授業において「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していた」という点が改善をしなければならない状況である。また、2教科の正答率が高い児童は、上記の改善点に対しても望ましい回答が得られていた。課題がみられた点については、教育課程の見直しや授業改善、家庭学習の定着などの取組を通して改善していきたい。各家庭にも結果を公表し、家庭とも連携して自己肯定感をさらに育む「自分のよさ、可能性、成長をより実感できる」機会の充実を図っていきたい。

2 研究内容

（1）「甲府スタイル」の検証に向けた手だて

①研究主題、主題設定の理由

学びを楽しみ、自ら学ぶ児童の育成

～子どもが主役の個別最適な学びと協働的な学びを通して～

1. 今日的教育課題より

社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となっていており、しかもそうした変化が、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子どもたちの生き方に影響するものとなってきている。社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば、難しい時代になっていくことも考えられる。

しかし、このような時代だからこそ、子どもたちは、変化を前向きに受け止め、私たちの社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしたり、現在では思いもつかない新しい未来の姿を構想し実現したりしていくことができる。

学習指導要領においては、「これからの学校には、（略）一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。また、令和3年の中央教育審議会答申では、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。

これらのことから、これから生きていく子どもたちに必要なことは、どのように変化しようとしてそれに主体的に対応できる力を身につけること、そして、変化に対し柔軟に対応し想像力・創造力を働かせて、それを楽しみながら解決していこうとする姿勢だと考える。そのためには、単に知識を受動的に受け取るだけの学習ではなく、自身で学び方を考え、必要な知識や情報を得たり活用したりする力を養わせていくことが大切である。そして、このような力を身につけさせるためには、教師が支援の必要な子どもにより重点的な指導を行ったり、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行ったりする「個別最適な学び」と、探究的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできることなどの実感を持つことができる「協働的な学び」を充実することが重要である。

2. 本校が考える「学びの楽しさ」とは

(1) 学びが楽しい学校とは（グランドデザインより）

学びが楽しい学校とは、子ども自身が日頃の学習や生活において「わかった」「できた」と実感できる学校である。そして、子どもたちがそのような実感に向けて、安心して一步を踏み出すことができたり、一度経験したことを基に、新たに挑戦したりすることができる学校でもある。このような子どもたちの学びに向かう姿勢に寄り添い、子どもたち一人一人の「わかった」「できた」といった実感を大切にしていくことで、子どもたちは学びを楽しみながら学校生活の中で成長していくことができる。と考える。

また、自ら学びを進める（調整する）楽しさを見出させていくことも大切だと考える。これまでは課題を設定し追究する問題解決的な授業スタイルが重視され、全員が同じ手段や方法で同じゴールに向かっていく一斉指導型が多くあった。しかし、子どもたちがこれから先、多様な局面に出会ったときに自分の特性や興味関心に応じて主体的に対応する力を身につけていくためにも教師が全て一律に指示を出すのではなく、子どもたち一人一人が自分に合った手段や方法を考えたり選択したりして、自ら学習を調整する学習者主体型の学びを目指していく必要があると考える。自分で「決める」「選ぶ」「進める」といったことで課題を解決できたとき、自身の特徴を理解することにつながり、自信となって達成感や学ぶ楽しさを実感することができる。

(2) 楽しく学ぶための授業とは

授業において子どもたちが楽しく学ぶためには、まず、課題を子どもが自分のための問題として受け止めることができることが重要である。子どもたちの驚きや不思議さ（「えっ」「どうして」）必要感（「やってみたい」「何とかしたい」）、不都合感（「変だな」「おかしいな」）身近さや既習事項とのずれ（「ちょっと知っている」「前と違うな」）を生じる問題を提示し、それらを「学びたい」という意欲につなげることで、子どもたちが「教えられる」のではなく「自ら学ぶ」スタートを切ることができる。と考える。

次に、子どもたちが学習の「見通し」と「振り返り」を行うことがあげられる。「見通し」は

教師がその時間の授業で身に付けさせたいこと、達成したいことを子どもたちと共有するとともに、子どもたちが「何を」学ぶのかを確認する「学習目標・学習内容の見通し」と、もう一つはそれを達成するために、子どもたちが「何を使うのか」「何から始めるのか」「どれくらいの時間をかけるのか」「だれと行うのか」といった「どのように」学習を進めていくのかという「学習の手順の見通し」の2つである。「見通し」をもって学習を進めていくことで、子どもたちは目標を確認し、自分の特徴や関心に合わせて学習を進めることができるため、より主体的に問題解決に向かい、学びを深めていく姿が期待できると考える。

「振り返り」は、導入場面で行うことで子どもたちが「見通し」をもつ助けとしたり、安心して学習に向かうきっかけとなったりする。まとめの場面では、子どもたちが「何がわかったか」「何ができるようになったか」を振り返っていくことで、子どもたちに「わかったこと」「できたこと」だけでなく、自身の学びの過程を大切にできる意識も育て、子どもたちは、学習をがんばった楽しさややり遂げた喜びを一層実感できるようになると考える。

(3) 個別最適な学びと協働的な学びを通して

未来の社会を見据え、子どもたちの資質・能力を育成するに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが重要である。

「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つに整理される。「指導の個別化」は、一定の目標を全ての子どもたちが達成することを目指し、子どもに応じて異なる方法等で学習を進めることであり、その中で児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことである。「学習の個性化」は、子ども一人一人の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げることの意味し、その中で子ども自身が自らどのような方向性で学習を進めていったら良いかを考えていくことである。昨年度の本校の研究を生かしながら、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」にそれぞれ整理し、今年度の授業づくりに取り入れていきたい。

「協働的な学び」は、子どもそれぞれが持ち寄った多様な考えを組み合わせ、よりよい考えを生み出したり、自身と異なる他者に触れながら、それぞれのよさで互いを補い合って取り組んだりすることである。「協働的な学び」によって、子どもは自分の活動が友達に影響を与えるということに気づき、それが主体的に学びに向かう姿勢や学んだことを人生や社会づくりに生かしていこうといった意識や積極性を高めていくことへとつながっていく。

今年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の形式を授業に取り入れる段階から、研究・追究を重ねる中で、上記のような学習を進めていくために必要な要素を明らかにし、子どもが主役となった「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させる授業を展開していけるようにしたい。

②研究の柱となる方法及び具体的な取組内容

②-1 研究目標

場面や手立てを工夫し、個別最適な学びと協働的な学びを充実させた子どもが主役の授業を実践することで、学びを楽しみ、自ら学ぶ児童を育成する。

②-2 めざす子ども像

- ①課題解決に見通しをもち、自ら進んで楽しく学ぼうとする子ども
「なぜ・何を・どのように学ぶか」を自分なりに理解し、進んで学ぶ。
- ②課題解決に向け、自らその方法を考えたり選んだりしながら、友達と協力して学べる子ども
自身の特徴や経験から方法を決めたり、解決方法を見出したりできる。
- ③振り返りにより、学んだことを整理したり、自身の学び方を見直したりできる子ども
「何がわかったか・できるようになったか」や「どのように学んだか」を振り返ることができ

る。

②-3. 研究内容

見通しを大切にしたい個別最適な学び（指導の個別化・学習の個性化）のある授業づくり

- ・授業のねらいを明確にし、子どもが今日の学習で目指すめあてを意識して、学習に向かえるようにする。
- ・指導の個別化・学習の個性化を生かした指導方法や学習内容等を明らかにする。

みんなで学ぶよさを実感できる協働的な学びのある授業づくり

- ・共に学んだり学んだことを伝え合ったりすることで、学んだことを深められるようにする。
- ・ICTを活用した協働的な学びの指導方法や学習内容等を明らかにする。

学んだことや自身のがんばりを振り返り、自身の学習に生かせる授業づくり

- ・めあてに向けての自身の取り組みを振り返り、学び方を意識して学べるようにする。
- ・教師・子ども双方が次の学習に向けて、振り返りを生かしていけるようにする。

(2) 研究計画

※研究内容、成果の公開、研究成果の検証等の予定は現時点で詳細に計画できていない。

5 / 12	第1回校内研究会 全体会 甲府の子供の教育総合推進校について 研究主題・研究内容など提案。協議
6 / 5	第2回校内研究会 ブロック研 目指す子ども像・授業の方向性について
6 / 19	第3回校内研究会 ICTの校内研修
7 / 3	第4回校内研究会 学習会 (ICTの活用と目指す児童の姿を実現する授業について)
7 / 22	第5回校内研究会 学習会 (個別最適な学び・協働的な学びについて)
8 / 未定	第6回校内研究会 (授業検討・各ブロック)
8 / 23	第7回校内研究会 全体会・特別支援研修 授業の構想、ICT活用の実態
9 / 25	第8回校内研究会 第1回授業研究会 全体会
10 / 30	第9回校内研究会 第2回授業研究会 全体会
11 / 13	第10回校内研究会 第3回授業研究会 全体会
12 / 11	第11回校内研究会 全体会・ブロック研 研究集録について アンケートについて
1 /	第12回校内研究会 全体会 今年度の研究の中間まとめ (成果と課題)

2 /	第13回校内研究会 全体会 来年度の研究に向けて
-----	-----------------------------

3 成果等の把握と検証の手だて

(1) 実施する調査

- ①「全国学力学習状況調査」令和5年度から7年度までを比較
- ②「Q-U調査」
- ③学校評価「児童アンケート」「保護者アンケート」

(2) 実施日程

- 1学期・・・「Q-U調査」1回目
- 2学期・・・「Q-U調査」2回目
学校評価「児童アンケート」「保護者アンケート」

(3) 調査結果の活用方法

- ・1学期のQ-U調査の結果から、学校生活における児童の意欲や満足感、及び学級集団の状態を把握し、よりよい学級経営に生かしていく。
- ・3学期に行われる学校評価の結果を前年度と比較・検討し、授業づくりや生活指導の更なる改善に活用していく。
- ・2カ年の研究であるため、中間まとめを報告書にまとめる。